

陳舜臣さんを語る会通信

NO.98

Feb. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2023年2月20日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

円熟した陳文学の香気高いエッセイ『雨過天青』^{う かつんせい}

本号ではエッセイ集『雨過天青』(1994 尚文社ジャパン)を紹介いたします。

82編、どれも、深い学識と人間味溢れる作品です。最高の知を味わって下さい。

(編集委員 橘雄三)

尚文社ジャパン版『雨過天青』「あとがき」より転載

小見出し及び傍線は編集委員の加筆

本書誕生のいきさつ

この数年間に私が書いたエッセイは、集めてみると意外なほど多い。できるだけ仕事量を減らしたつもりなのに、これではいけないと反省することしきりである。

私は自分についての記録に関しては、ぼろで、掲載紙(誌)をとっておくという習慣もない。これまでのエッセイ集は、出版社の担当の人が、あれこれと集めて下さったのである。ところが、FAXという便利な機械が登場して、原稿はあちらへ行かずに、こちらに残ることになった。私はそのたびに、大型の紙袋のなかに、残った原稿を入れておくことにした。友人の芦沢孝作氏が、新しく出版業をはじめるといので挨拶におみえになり、「なにかありませんか？」とおたずねになった。私は例の紙袋がすこしふくらんでいるのを出し、「一冊分には足りないかもしれないませんが」と、一応、お渡しした。あとで電話で、「一冊分は優にありました」という連絡を受けた。私にとっては意外なことだった。

以上が、本書誕生のいきさつである。リストをみると、すべて一九九〇年以後に発表されたエッセイであり、その年の一月号に掲載された作品は、とうぜん一九八九年に執筆されたはずで、これは

平成元年にあたる。元号があらたまったのは、ついこのあいだと思っていたが、もう平成も六年になっている。ふくらんだ紙袋の内容が多かったのは、考えてみれば、それほど意外なことでもなかったのだ。

題名「雨過天青」の意味

本書に収めた「青磁色」のなかに、後周世宗の柴榮が、開封府にひらいた新しい窯で焼造する青磁の理想の色を、

雨過天青雲破処

と述べたことを紹介した。

世宗は天下の仏寺三千三百二十六を廃し、仏像や梵鐘などをこわし、当時不足していた錢を鑄造させたことで知られている。これは経済回復に大きく役立ったようだ。あとにつづく宋代で経済が大発展したのは、世宗が基礎を築いたからだという説がある。

世宗が死んだとき、最年長の皇子は七歳だったので、諸将は軍の最高首腦の趙匡胤を擁立して皇帝とした。宋の太祖である。彼は宮殿の奥深い所に、遺訓を石に刻み、のちの歴代皇帝が即位するとき、たった一人でそれを見て胸に刻みつけることをセレモニーとするようにさせた。宰相といえども、それを見ることはできない。一一二六年、金が開封を陥したとき、はじめて石刻の遺訓が一般に知られた。それは後周世宗の後裔を、あくまで皇族として遇すること、そして士大夫を言論によって殺してはならぬことを指示したものだった。宋代は新・旧兩法の派

閥争いのはげしい時代であったが、蘇東坡のように海南島に左遷されるのが最も重い罰で、言論によって処刑されることはなかった。世宗柴榮の子孫は、三百年のあいだ、宋が南遷したあとも皇族として遇された。

血なまぐさい事件の多い歴史のなかで、これはまことに「雨過天青」的なさわやかな風を感じさせる。雨過天青磁はまだ一点も発見されていないというが、私たちはそれを追い求めたい。そんな願いをこめて、このエッセイ集のタイトルを、「雨過天青」としたのである。

一九九四年八月 陳舜臣



尚文社ジャパン版表紙

■補足(1)

右の表紙、カバーデザインは陳幼芳となつてゐる。陳舜臣さんのご子息立人氏ご夫人(陳芳子様)のペンネームです。

補足(2)

あとがきの日付が一九九四年八月となつてゐる。陳舜臣さんは八月十日、宝塚大劇場で講演中に脳内出血で倒れられた。このあとがきを書かれたのはその直前ということなのでしょうが？

『雨過天青』 目次、及び内容の補足(一)

小見出し及び傍線は編集委員

目次(I、II)

I

故宮の文物
東の桃源郷

―徐福について

牧歌期の終焉

関帝廟縁起

気の流れ

二胡羊図

青磁色

曲筆の史官

頭かくして

呉越のこと

II

十八世紀

居酒屋、茶館、旅籠

茶館と茶の文化

茶事小話

へ一茶の作法

へ二水と茶と

へ三イギリスのお茶

へ四お茶に氷を

へ五ウーロン茶

へ六サモワール

コウジの話

春を待つ



サモワール

「気の流れ」

「気の流れ」では、導引どういんということばが頻出します。ところで、導引とは、身体を屈伸したり深呼吸したりして大気を体内に入れる健身法、養生法のことです。「気の流れ」の記述です。

一九七一年に発掘された馬王堆漢墓まおうたいはその一号墓から「生けるが如き貴婦人」の遺体が発見されたことで世界的なニュースになった。つづいて発掘された三号墓は、被葬者が一号墓の貴婦人の息子らしいが、そこから帛画が四枚出土した。そのなかに「導引図」があった。文字だけではなくついに図があらわれたのである。

私(橘)は一九九三年の年末、中国人の友人の案内で馬王堆漢墓と湖南省博物館を見学した。このことについては本通信No 49でも触れている。この時、博物館で3キロを超える大部な書物、『馬王堆漢墓文物』(湖南出版社一九九二年)を買った。三百五十元だったが、当時、一元が二十円だったので七千円もした。それよりも、重くて日本へ持ち帰るのが大変だった。「気の流れ」を読んで、この書物のなかに導引図があったことを思いだした。(左の画像)



「二胡羊図」



「二胡羊図」では、趙孟頫ちやうもうくわの「二胡羊図」がとりあげられています。ワシントン・フリア美術館蔵です。陳舜臣『中国画人伝』に載っています。右の画像です。

陳さんは、同じ趙孟頫の「蘇李泣別図」にも言及します。蘇とは漢の使節として匈奴に抑留された蘇武のこと、李とは匈奴との戦いで捕虜となり、優遇された李陵のことです。

画像、二匹の胡羊について陳さんは、世評とちがって、右のアンゴラ山羊が蘇武で、左の太った山羊が李陵だといいます。詳しくは本文をお読み下さい。

「茶事小話へ五ウーロン茶」

上質のウーロン茶は、華ちやう大の小さな急須にいれて、お猪口ちやくこでどの湯のみで飲む。まるでママゴトのかんじである。急須も茶杯も朱泥のやきもので、とくに宜興ぎきやう(江蘇省)の窯のものが最上とされている。



宜興窯、朱泥で焼かれた急須と茶杯

「春を待つ」

九九

消寒図



冬至から、九十九、八十一日、毎日、花びら一枚を紅く塗っていくと、全部塗り終わる頃には春になる。

『雨過天青』 目次及び内容の補足(二)

小見出し及び傍線は編集委員

目次(Ⅲ、Ⅳ)

Ⅲ	橋の話	ベネチアと橋	カササギの橋	カレル橋	首里のこと
Ⅳ	ロバの値段	ゼニの恨み	シヨッピングを	待つあいだ	車社会
	ほかの諸氏	ヘルビさん	ヒツジ	女の名前	夫婦別姓
	貢献度と責任度	白菜	義戦	常識	袈裟
	紅白	升田さんの下駄	典礼問題	文字	サラデイン
	ネーミング	カラス	捕虜の運命	伸縮	ウンゼン
	情報化社会				

「橋の話」

「橋の話」から引用します。

十七世紀の版画をみると、ロンドン橋はすでに九つのアーチをもつ石造だが、橋の上ゼンたいに、五階建てほどの建物が乗っかり、それがずらりとならんでいる。道路は建物のなかに組みこまれているので、アーケードの下を歩くようであったにちがいない。



陳舜臣さんの文章に一番よく合う画像を使用しました。この画像は、ネット上たくさんありますが、オリジナルはどこの所蔵かわかりません

「ベネチアと橋」

「ベネチアと橋」から引用します。

ガイドブックによれば、ベネチアの橋は約四百であるという。水上バスやゴンドラが通れるように、橋はアーチ型になっており、自転車まで含めて、車は通れな

いようになっている。

ベネチアの代表的な橋といえば、大きなアーチをもつリアルト橋であろう。木造の跳ね上げ橋だったのが、十五世紀に石造にかわったのである。



右はリアルト橋(www.howtravel.comより)。上は橋からの風景(編集委員撮影)

「カレル橋」

「カレル橋」から引用します。

チェコの首都プラハのカレル橋は、いつもにぎやかである。プラハ城一帯を見物した人たちは、ブルタバ川にかかったこの橋を渡って、右岸の市街区へ行くのが、標準的な観光コースであるようだ。

橋の名称でもわかるように、神聖ローマ帝国カレル四世(在位一三四七七八)



カレル橋 ja.wikipedia.org より

の建造したものである。ブルタバ川には、いくつもの橋がかかっているが、カレル橋が最も古い。

なおブルタバ川は、私たちにドイツ語読みの「モルダウ」のほうが親しみやすい。スメタナ(一八二四―一八八四)はチェコの作曲家だが、彼の交響詩組曲『わが祖国』第二曲は、もう私の頭のなかには、「モルダウ」として刻みつけられていて、どうしようもない。

いまこの国は、チェコとスロバキアの分離問題がおこって、どうもその可能性は濃いようである。

■「カレル橋」の初出は『オーバル』一九九二年一一、一二月号で、チェコとスロバキアの分離は執筆直後、一九九三年一月のできごとです。

『雨過天青』 目次及び内容の補足(三)

小見出し及び傍線は編集委員

目次(V-VII)

V

二十年について

視座を変えて

船の目

琉球館客商信局

紫禁城の甲冑

ゴーヤ雑誌

奇説珍説

泡盛屋さん

新ミツレト

清明

ブハラのおとおり

VI

械闘

自作再見

落慶談義

私の無名時代

三十年のこと

再会の旅

もうひとつのあとがき

——『中国の歴史』を

書きはじめた頃

人間をみつめて

書庫雑談

教え子の還暦

漢方雑談

吉川三國志と私

書かれざる歴史

自分の顔を知る

VII

トプカプ宮殿至宝展をみて
カッパドキアを歩く

勲章のこと

清代の工芸

死後についての指示

クスリ

慈悲へのあこがれ

「船の目」

「船の目」から引用します。

琉球進貢船が福建で復原され、無事に進水式を終えたことを、NHKのスタッフの人たちにきいた。船首に大きく目がえがかれるが、高良倉吉氏によれば、ワシやハヤブサの目として強調されている。



natureclub.ti-da.net より

「二十年について」

「二十年について」から抜粋引用します。

十年ひと昔、という。：

一世三十年、という。：

この三十年と十年とのあいだが二十年であり、英語ではスコア (Score) ということばであらわされる。

終戦の年に、私は満二十一歳であった。二十一年のあいだには、物心のつかない時期も含まれるが、私はいつのまにか、約二十年を尺度にして、歳月をはかる癖がついてしまった。

沖縄の二十年前は、いうまでもなく復帰の年である。：

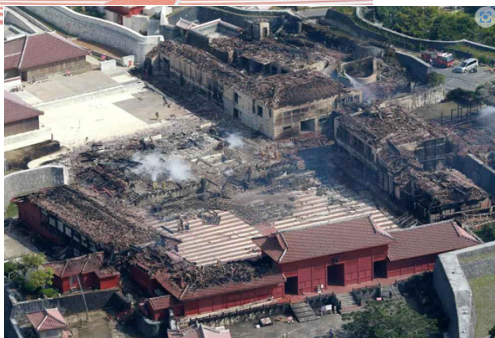
だが、歳月の尺度を過去にばかりあてるのは、いかなるものであろうか。

同じ尺度は未来にもあてることができる。

復帰二十年の沖縄の二十年後はどうなっているだろうか。ふりかえるばかりではなく、前向きにそんなことを想像したい。



画像はwww.okinawatraveler.netより



画像はwww.sankei.comより

■「二十年について」を含め、第V章の十一編は、復帰二十年の一九九二年六月二一日、九三年六月二〇日、「沖縄タイムス」に連載されたものであるが、同時期、『琉球の風』が、『小説現代』の九二年二月号、八月号に連載され、翌年、NHK大河ドラマとして放映されました。復原なったばかりの首里城も主要な舞台となり、進貢船(上梓内画像)もロケに使われ、沖縄県民を元気づけました。

ところが首里城は二〇一九年十月三十一日、火災により焼失しました。陳舜臣さん、没後、ほぼ五年の出来事です。

「もうひとつのあとがき」——『中国の歴史』を書きはじめた頃



清東陵、景陵(康熙帝の陵墓)
編集委員撮影

このエッセイを読んで一つ発見をした。陳舜臣さんの数多い中国旅行の行程に、清東陵が含まれていたことです。集英社『陳舜臣中国ライブラリー30』『年譜』にも、同じく集英社発行『Who's 陳舜臣』「第八章 世界旅の記録」にも、一九八〇年七月の項に清東陵行はありません。

一九八〇年、…。七月に朝日の洋上大学講師として博多から天津へ行き、清の東陵などを参観した。

私(橋)も、二〇〇九年、天津に遊んだとき、清東陵まで足を伸ばしました。この時の様子は私のホームページ「中国の友人たち」に詳しい。